

Title	カルタゴ撲滅論考
Sub Title	
Author	近山, 金次(Chikayama, Kinji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1943
Jtitle	史学 Vol.21, No.3/4 (1943. 6) ,p.85(365)- 115(395)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19430600-0085

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

カルタゴ撲滅論考

近 山 金 次

周知の如く古代都市カルタゴを滅亡させたポイニ戦役なるものは西部地中海の覇權をかけてローマとカルタゴとの間に闘はれた戦役であり、その期間も長く、大體三つの段階に分れて闘はれたものであつて、最初のもは紀元前第三世紀の中頃、第二回目は同じく紀元前第三世紀の末、第三回目即ち最後のものは紀元前第二世紀の中頃に於てそれぞれ激闘を繰返してゐるのである。戦局の見とほしは早くも第二回目の戦闘によつて決定的となり、その結果カルタゴは北アフリカの一都市に歸し、ローマは西部地中海の覇者となつた。ローマの國家意識もこれによつて非常な飛躍を見たものであり、例へばローマに關する修史の發達はこの時期を通して生れて來ると言つてよいのである。その長い事件の最後に來る悲惨な徹底的なカルタゴの破壊について云々する前に先づ第二回目の媾和と第三回目の宣戰とを對照しつつカルタゴの破壊に至る梗概をまとめて見よう。

第二回目のポイニ戦役の媾和條約として傳へられてゐるものは

一、象軍及び(十隻を除いて)全艦隊を引渡す

二、カルタゴはリビア以外の地に於て戰鬪を行はず、リビアに於てもローマの許可が無ければ之を行ふことなし

三、西方は凡てヌミディア王マシニッサに返還する

四、銀一萬タレント(賠償金)を五十年賦(毎年二百タレントで)支拂ふ

五、ローマの指名する人質百名をローマに送る

といふのであつた(Polyb., XV, 18; Liv., XXX, 37; App. Pun., 54)。かくてカルタゴは地中海の大國たることを止め、その將來に於て外敵侵入の危險にさらされることとなつた。戰費の調達、募兵、外交交渉、食糧供給を切りぬけて終にこの勝利をローマにもたらしたものはスキピオを中心とする元老院であつた。これがその後の大勢を牛耳るに至つたのは當然のことである。さてその後の動きをポリビウス、リヴィウス、アッピアヌス、プリユタルクスその他を通して要略して見れば大體次の如くである。

第二回ポイニ戰役後カルタゴの勇將ハンニバルは大なる熱意をもつて弊政の改革に努め、殊にローマへの償金支拂のための財政整理を實行し、官界の肅正を斷行してゐる。他方に於て彼は地中海東部の諸國との同盟を策し、殊にシリア王アンティオクス三世との同盟を念願としてゐたらしい。この計劃は内政改革の生んだ私憤からローマへの密告となり、ローマはハンニバルの引渡をカルタゴにせまり、ため

に紀元前一九六年ハンニバルは亡命してアンティオクス三世の下に走ることになった（その後、彼は更にビティニアへ走り、紀元前一八三年頃に自殺したと傳へられてゐる。時に六十四歳）。その後カルタゴの經濟は著しい復活を示し、例へば紀元前一八七年には賠償金の殘額七千二百タレント（三十六年分）の一時拂を申出た程である。カトーのカルタゴ撲滅論がこの恐るべき經濟復活と云ふ點に相當の根據をもつてゐたことは事實であらう。しかも初め支持者の少なかつた此のカルタゴ撲滅論は次第に贊成者を得て戰意が成熟すると共に戰爭の口實を生んで第三回ポイニ戰役となつたものらしい。リヴィウス(LIV., XLVIII-XLIX)によればその理由（口實）となつたところはヌミディアとカルタゴとの交戦が媾和條約の違反であると言ふのであつた。之に對しカルタゴはその交戦の責任を愛國黨に嫁し、その首領ハスドルバルに死刑の宣告をなしたが、それに關係なくローマは紀元前一四九年に決戦の決意をした。更にカルタゴは有力者の子弟三百名を人質とし、武器軍艦をローマに引渡して和平を請うた。之に對するローマの最後通牒はカルタゴ市を海岸より十哩以上距つた處に移せといふことであつた。この實行は事實上カルタゴ市の滅亡に他ならぬものである。此處に著名なカルタゴの應戦が開始された。その要害に加ふるに豊富な食糧軍資はその決死の奮闘と結ばれて、そのためローマ軍は相當の苦戦をしたものの如くである。終に若きローマの名將スキピオは陸海兩軍を以てカルタゴ市への糧道を斷ち、紀元前一四七年の冬を越えると同時に敢然總攻撃に移り、六日間に亘る市街戦でカルタゴ市民の大半を殺戮し、全

市の劫火十七日間に及んで盡く灰燼に歸したと言はれてゐる。

この壊滅を記した第一人者は有名な歴史家ポリビウス (Polyb., XXXVI, 2-8, XXXVII, 10, XXXVIII, 1-2, XXXIX, 3-5) で、彼は自らスキピオの友としてこの時ローマの陣中にあり、親しくこのカルタゴの最後を目撃したものであつた。彼の書はそれだけに深き感銘に充ちたものである。少し時代が下つてリヴィウス (Liv., XLVII-LI) やプリュタルクス (Plut. Cato Maj.)、アッピアヌス (App. Pun., 74-135)、フロルス (Flor., II, 15) 等になるとそれぞれ之に若干の説明を加へてゐる。例へばリヴィウスが媾和條約違反の問題についてローマの立場を強調すれば、之に對してアッピアヌスは全然否定的な立場をとり、カルタゴの經濟力の回復に對するローマの恐怖を問題にしてゐると云ふ具合である。後世の歴史家もその準據する材料の如何、またそれを解釋する角度の差によつて甲論乙駁であるのはやむを得ぬところであらう。

曾て一九三一年、フランスの史學雜誌 (Rev. His., CLXVII-CLXVIII) にソータニエ Ch. Saumagne が第三回ポイニ戰役勃發に關する種々の理由を分類し、それぞれ其の説明の仕方を分解した論文をのせた。しかし要するにその最後の言葉として『吾人はこの戰爭の原因については論及しない。その原因について確實な資料の缺除を見るからである。その多くの原因が既に確立された後に於て行動の世界へ移つて行くその動機について探究して見たいと思つたのである』と申して、その動機のとらへられ方、そ

れに對するローマ人の態度、歴史家の解釋の仕方などを微妙な觀點にまで立入つて論究してゐるのである。如何にもソーマニユの説く如く、その原因は多い、しかし確實なところは材料の不足で到底分らぬ、なるほどさうである。しかし筆者の考へることは、歴史家の任務と云ふものが其處に止まつてよいのか、と云ふことである。歴史は理解の學問であると云ふ、然らば何を理解せんとするのか、とりもなほさず史的に最も意義の重大なものを理解せんとせねばならぬ。此の場合カルタゴ撲滅について書かれた理由は事實どれを見ても問題にならない。それは何れも口實の域を出ないものばかりである。従つてその意味から言へば當時すでに然う云ふ口實が種々な點で問題を起してゐるのである。然う云ふ口實とか動機とかいふものの底に、もつと他に本當に戰爭を動かしてゐるものがあるのではないか。もしあるとすれば我々はそれをこそ見出し、そのことをこそ考へて見なければならぬ。我々は問題の表面に浮動してゐる幾つかの理由や口實などに迷はされてはならぬのである。その表面に出てゐる、多少なりとも歪んだ世界の變化の中に我々の考へを動搖させてゐてはならぬ。本當にその戰爭を動かしてゐるものを理解しようと思ふべきではない。ところで今言ふ様にその材料は殆んどないかもしれない。貧弱な材料を前に然う云ふ努力をすることは一見まことに大それた野望的なものに見えるかもしれない。しかし其處にこそ史家の本當の世界があるのではないか。重箱の底をほじくる様なものが――筆者はこう云ふ仕事に對しても勿論、十分の尊敬を感じてやまぬものであるが――果して史家の任務の凡てなのであらうか。歴史

家の任務は決してその様なものに止まるものではないと信じたい。歴史家は歴史家であることによつて屢々、極めて屢々當時の人々が決して知らなかつた様な重大な事柄を知つてゐるのが常である。歴史的に見れば同時代の人々よりも我々の方がその時代を遙かによく知つてゐる筈である。勿論、片々たる日常の茶飯事は知るべくもない。然し或る事件の成り行きやその事件と時代とを結びつけての考察やその事件の世界史上に於ける意義などは我々の方がづつとよく知つてゐる場合が屢々ある。例へば此處に問題として居るカルタゴの撲滅は古代地中海世界に於ける一大轉換であり、これが東方の情勢と結ばれてローマ史に於ける世界史的な轉換であることは當時すでに偉大な歴史家ポリビウスによつて看破され、まぎれもない事實として我々もまた然う考へてゐる。しかしそれは我々から見れば古代史上の一轉換に過ぎない。古代と中世とを別つ様な大きな變化ではない。その様なことはポリビウスにも到底分らなかつた。事實そのことを知つてゐるものは後世の史家のみである。

蓋し多くの場合、一つの戦争を生み出すものとして雑多の要素の影響を考へねばならぬのが常であるが、而も其處には常に全體を指導する理念といふものがあるのであつて、それを後から本當に見て行くものは歴史家のみであると言つてもよいのではなからうか。この場合、表面に出てゐる動機や理由など大したものではない様である。ところでその理念が餘りに多いと戦争はばらばらになつてしまふ。そのよい例は十字軍に之を見ることが出来る。また戦争の理由や動機は必しもその理念を直接に表すもので

はない様である。即ち動機が然う云ふ風なものでないことは極めて明瞭で何人もエムス電報が普佛戦争の原因であると思ふものはないし、サラエヴォの暗殺が第一次世界大戦の原因であると考へるものもないであらう。次にまた世上一般的に述べられた理由が必しも然うでないと言ふことについては現在ヨーロッパ新秩序の指導者ドイツが相ついで戦つた戦争についてヒトラーが次々と述べた種々な異つた理由を見ても明瞭であり、ことに一九四一年末にヒトラーのつた態度などはその典型的なものであると言はなければならぬ。即ち對ソ戦が開始された當時のヒトラーは本當の敵が英であること、先づ後顧の憂ひを斷つべきことを説いてゐるが、同年末になると冬將軍を迎へるに際してソ聯の驚くべき軍備、共産主義の危険、ヨーロッパに共通の敵とドイツが闘つてゐることを強調することにのみ終始してゐるのは誠に顯著な事柄である。然うかと言つて動機や理由が大切でないといふわけでは毛頭ないのである。第一それなくしては戦争は起らない。『さうでなくても……』と云ふ假定は此の場合、勿論許されるであらうけれども、ともかく現實の動きはそこに足場をもつて動いたと云ふ意味でその足場は既に大きな史的意義をもつのである。しかし我々にとつてもつと大きな史的意義はそれを現實の足場たらしめた理念そのものであると言はなければならぬ。そしてその理念は片々たる而もゆがんだ材料を後世に残すのみであるかもしれない。しかも此の場合、その材料を通してその本體を見ようとする努力こそ、それこそ本當の歴史的なものを理解せんとする、また理解し得る唯一の態度ではないであらうか。何故ならそれ

を理解せんとして努力し、また事實その努力を通して理解し得るものは歴史家を措いて他にないからである。實に同時代人が知らなかつた様な、到底理解し得なかつた様な世界を歴史家は知ることが出来る。この場合、我々の考察は宛も音楽家が樂符を通してメロディーを作り、ハーモニを生むのと同似たものがあり、勿論それ以上の困難は覺悟しなければならない。我々は全然樂符なしに取のこされる場合が屢々ある。然もその場合、分らないと言はないでやはり考へて見なければならぬ。その様なことは此處に斷るまでもなく歴史家である以上はやらねばならぬ仕事であり、事實それを意識すると否とに關りなく歴史家と稱せられた人々は何れも然うしてゐるのである。一體これまで過去の歴史家が一つの史實と他の史實との間を流れてゐるものを考へては歴史を書いて今日までそれを傳へて來たことを吾人は忘れてはならぬ。我々がギリシア史といひ、ローマ史といひ、また中世史といふも嚴密に言つて皆その努力の現れでないものはない。我々はその先人の努力を多とすると共に一層大なる勇氣をもつて我々に殘された仕事をしなければならぬのではないか。果して我々は單に與へられた、而も多くの場合全く一面的であるか、若しくはゆがめられてゐるかする事實で満足してよいものであらうか。然う云ふものに沈潛することによつて大きな時代の流れを忘れてよいものか。若し然りとすれば歴史家の存在は人類の知的活動の中で最も貧弱なものに屬し、要するにあつてもなくてもよい、好事家の知的遊戲に遠からざる程のものとなり、歴史家が歴史家にしてはじめてなし得べき専門の世界と言ふべきものは何等存

在しないと云ふことになるであらう。一體、人類史に於て最も重要な且つ大きな問題は多くの場合、それが大きな變革であり、變動であるが故に通常殆んどまともな材料を後世に残さないのが普通であり、もし歴史家にして敍上の如き態度に終始するならば問題は常に未解決のままに取のこされて行くのである。歴史に於ける最も重大な要素たる國家の盛衰や文化力の消長についての考察は常に放置されて顧みられぬと云ふことになつてしまふのである。其處に生れて來るものは細かな片々たる事實の穿鑿、もつと正確に言へば事實らしきものをつなぎ合せる極めて常識的な見解であつて決してそれ以上のものではないと云ふ様な慘めなことになるのである。その一例を申して見れば世上、十字軍の東方文化西方移入説と云ふものがある。これはキリスト敎世界が最も積極的にイスラム世界に挑みかけた歴史的事象としての十字軍と中世後半に於ける西歐のイスラム文化の吸収の事實とを結び合せたものに過ぎないものと思はれる。なるほど常識的に言つてそれは可能である。さうかもしれないのである。しかし然う云ふ解釋で説明のつきかねる現象がそれと併行して存在するとすれば問題は別でなければならぬ。ところで十字軍はビザンツ文化の吸収を殆んどやつてゐないことは西歐史家の等しく認めるところである。同型のビザンツ文化の理解吸収に無力だつた西歐が、十字軍なる軍事的遠征を通して如何にして遠隔な地域に於ける而も異質の文化を吸収し得たとなすのであるか。抑、軍事的遠征に文化の吸収を説くことは相當考へて見ねばならぬことではないのか。然もそれにもかかはらず事實としてそのイスラム文化が

幾分か西歐に吸収されてゐるとすればそれは何故か。思ふにそれは十字軍の影響として考へられる地中海貿易の進展を通して見られるもので、十字軍から言へば寧ろ間接的な影響なのであらう。然もその影響と言つて見たところでは相當考慮の餘地があるのである。かかる遠征に於て出先の軍人や商人を通して何れ程の文化が吸収されたと言へるか。この場合、文化の吸収と云ふ點だけから言へば寧ろそれはヨーロッパに近いシシリーやスペインに於けるキリスト教徒の聖戰、それに伴ふキリスト教聖職者達——即ち當時の唯一の知識階級——の活躍を通してのイスラム文化の吸収の方がずっと大きな意味をもつてゐたのではないかと考へられるのである。

「なるほどカルタゴ撲滅の原因は數へ上げれば種々ある。しかも要するに本當のことは分らぬと言ふ。しかしそれでカルタゴ撲滅の如き世界史上の大事件に對する史家の責任は果されるのであらうか。それは少くとも曾て西部地中海を支配した一民族の運命が終止符を打たれた事件である。しかもその勝利者たるローマの動きは史家ロストフチエフの言を俟つまでもなく、この頃から俄然極めて積極的な帝國主義の色彩を濃くするのである。それはローマにとつても民族の運命の大きな轉換をかけた事件であつたと思はれる。この場合、筆者に痛感されることは残つてゐる片々たる事實はどうであらうと、我々はその本當の動きを凡ゆる事情から掘り下げて考へて見なければならぬ、本當の動きを理解して見ようとしなければならぬ、そこに歴史家の任務がある、そしてさう云ふ態度こそ本當に歴史的なものに觸れ

る道ではないか、と云ふことである。歴史は理解の學問であると言はれる。しかし理解するには十分考へて見なければならぬ。ただ事實とおぼしきものを常識的に按配することであつてはならぬ。もし飽くまでも事實は事實、不明は不明と云ふ様な態度を固執して行けば世人の歴史に對する期待と歴史家の提供する材料との間には無視し得ぬ深い溝を生むことになる。即ち歴史家はひたすら材料に對する峻嚴なる態度を固持しつつ明不明を口にする、世人にとつてその明不明などは實はどうでもよいことで、歴史家に解いてもらひたいことは各變動の人類史上に於ける地位乃至意義であると云ふ様なことになるからひがある。この場合、歴史家は貧弱な材料にしばられて、分らぬことは分らぬといふ態度で終始してよいものか。實はそれを考へることが歴史家の重要な任務の一つなのではないか。本當に歴史的と呼ばれるものは然う云ふものなのではないか。これは實に歴史研究にたづさはる我々にとつて重大な問題ではないのであらうか。例へば一つの美しい畫を前にしてその説明を聞きたいと言ふ人々に向つて、それをかいた畫家の生死の年月日や生活の變遷を若干物語り、分つてゐることはそれだけだと言葉を切つたら何う云ふことになるであらう。勿論カルタゴ撲滅の如き史上の重大事件に對する解釋は歴史家である以上、たとへ無意識であつても之を試みなければならぬ。事實、そのことは絶えず繰返されて試みられてゐる。當然のことである。しかし歴史家がそれをもつと意識的に積極的に本腰にやつてもよいのではなからうか。史上には歴史家が考へて見なければならぬ重大な問題が無數にある様に思はれる。歴史家

はその材料の考證に對する努力を磨くと共に、半面こうした努力をもつと積極的にしなければならぬのではない。筆者は此處にカルタゴ撲滅に關する東西の歴史家の解釋をならべてそれを批判檢討しようと言ふのではない。また自ら材料の中にふみ込んで其處に一つの解釋を出して見ようと言ふのではない。ただその問題について種々なことが考へられてしかたがない。さう云つたものを一つ此處にならべて見ようと思ふのみである。

先づ第一に注目すべきは、カルタゴは滅亡したといふよりも寧ろローマによつて撲滅されたと言ふ事實である。なるほどカルタゴはその末期に於てローマに對し讓歩に讓歩を重ね、武器と云ふ武器を一つ一つ剝奪されて誠に不甲斐なき姿でローマに滅ぼされた。然したとへカルタゴが然うしなかつたとしてもやはりローマによつて滅ぼされてしまつたであらうと云ふこと、これは注目すべき一つの重要な點であると思ふ。その位、ローマの態度には決然たるものがうかがはれる。従つて結果から見ればカルタゴは誠に慘めな死に方であるが、それは斷じて自殺の如きものではない。明白に之を壊滅せんとするローマ側の決意から事が出發してゐるのである。然らばそのローマの決意は如何にして生れてゐるか。それが問題とならねばならぬ。ところで此の場合、ローマ側に何等怨恨の如き感情がないことはカルタゴ撲滅の實行者スキピオの態度を通して明瞭であり、このことは十分注目して置かねばならぬ。カルタゴ

撲滅に對する牢固たる決意は何處にその源をもち、如何にして成長したものであるか。プリュタルクスの傳へるところによればそれは先づマルクス・カトーに出發してゐる。

『彼の最後の事業はカルタゴの破壊であつたと思はれてゐる。實際その事業を完遂したものは小スキピオであつたが、ローマ人がその戦争を企てたのは主としてカトーの勸告と劃策によつてであつた。

……(カトー、使節としてカルタゴへ赴く)……カトーはカルタゴがローマ人の思ふ如く貧弱な國家ではなく、勇敢なる兵士に充ち、巨大な富をかかへ、凡ゆる武器と軍備も充實し、用意萬端ととのへるものなることを看破した。それ故、ローマ人がマシニッサ及びヌミディア人の事件を調停する時ではない、その勢力がかくも恐るべき成長を見たのであるから常に憎むべき敵であつたこの都市を今にして制壓しなければ、再び以前の様な大きな危険を迎へるであらう、と思つた。此處に於て彼は急遽ローマに歸り、元老院に説いて曰く、カルタゴ人の昔の悲慘な敗北は然のみ彼等の勢力を滅殺したものではなく、ただ彼等の妄動を戒めたのみである、云々と。……彼は如何なる問題に投票するに際しても「余は思ふ、カルタゴ滅ばさざるべからず」と云ふ言葉をつけ加へた。……カトーは考へたのである、ローマが内政の失敗に對する處置を講ずべき餘裕を得んがためにはその覇權に對する斯くの如き外部よりの恐怖を一掃するに如くはない、と。かくてカトーはカルタゴに對する第三回目即ち最後の戦争を挑發したと言はれてゐる、云々』(Plut. Cato Maj., XXVI-XXVII)。

このカトーの行動についてはフロルスも同様なことを述べ、有名な *Delenda est Carthago* の語を傳へ残して居り、更にアッピアヌスはこの事情を一層詳細に説明し、カルタゴの繁榮がカトーその他により觀察され、その危険がローマに於て強調されたこと、これに對しスキピオが當時ローマの士氣のゆるめるを見て、その回復策として反つてカルタゴの存續を主張したこと等をポリビウス、リヴィウス、プリュタルクスなどと同様に傳へてゐる。残された之等の記述の中で明かなことは先づ第一にこのカトーの言葉がローマに於ては最初殆んど無視されて支持者を得なかつたこと、第二にその主張が當時ローマの一部に痛感されてゐた深刻な經濟上の不安に基いてゐること、である。兎も角、最初あまり顧みられなかつた此の撲滅論が次第に支持者を得て、終にはそれが元老院をして徹底的な殲滅を期する牢固たる決意を固めさせた情勢は如何なるものであるか。なるほど其處にはローマを不安にさせるに足るだけのカルタゴの經濟的復活が認められる。前述の如く紀元前一八七年には賠償金の全額支拂を申込んでゐる位である。ローマとしては特にそのカルタゴの農業が問題であつたこと、カルタゴの農業が當時相當の進歩を見せてゐたこと、カルタゴの文化に對するローマの關心がそのことにのみあつたことはその農業についての文獻のみを傳へてゐるのでも知られること、また當時農業の問題が元老院の一部に非常な關心をもたれてゐたことはカトーの「農事誌」等を見ても容易に推察し得ること、之等の事情は論を俟たぬのである。然らばこの經濟事情が次第に行詰りを見せて行くにつれて其處に戰意が成熟したと見る

べきであるのか。しかりとすれば如何にして經濟的行詰りが戰意を生まねばならぬのであるか。周知の如くポイニ戰役は大體、第二回ポイニ戰役をもつて終結したものと見てさしつかへないのである。何となれば第二回ポイニ戰役以後のカルタゴはローマから殆んど自主獨立の權能をすら拘束されてゐる一商業都市にすぎなかつたからである。前述した條約内容の一瞥によつても分るやうにカルタゴはまだ經濟回復の餘地を幾分許されてゐるところはあつたかもしれないが、政治軍事方面に於ては殆んど手の出しやうもない狀態に落されてゐたものである。之が經濟的にローマに脅威を與へるといふなら、之を政治軍事の方面から幾らでも制壓して行くことは出来る筈である。然も何等そこに怨恨の情もなくしてその徹底的な破壊を希ふといふのは普通のことではない。大體 *delendam esse carthaginem* と云ふ言葉は果してその様な經濟的打算から出てゐるのであらうか。抑々人間といふものが果して經濟的打算の上から武器をとり、血を流すものなのであるか。歴史上の戰爭を考へる場合にすべてその様に傭兵を取扱ふやうな考へ方で處理してもよいものかどうか。之は大きな問題ではないかと思ふ。ヒトラーの『我が闘争』を見ると、この前の大戦の時、聯合國は自由の爲に戦ふと唱して大いに士氣の昂揚を見せた、ドイツ側もそれに對抗する上から「パンの爲に闘ふ」と云ふスローガンを出した、するとドイツ軍の士氣にはかに沈滞した、ヒトラーは之を稱してこれは當り前のことである、こんな馬鹿げた話はない、誰だつて命あつてのもの種だと云ふこと位は承知してゐる筈だ、パンのために血を流すといふ位、馬鹿げた

話はない、といふやうなことを述べ、「パンの爲に闘ふ」といふ言葉が少くとも戦争の理由にならぬことを指摘して居る。しかもパンの問題が極めて重要な要素として其處に動いてゐると云ふことは無視出來ぬことで、それはカルタゴ市の移轉を命じてゐるローマの最後通牒からも明瞭に之をうかがふことが出来るのである。其處に戦意が熟したと云ふ、その成熟と云ふことは寧ろ一つの現れであつて、その背後にもつと大きな時代の勢がないものであらうか。具體的に申して見ればローマの國家存亡、民族の運命といふ様な大きな問題が其處に動いてはゐないか。然らばその様な動きは如何なるものなのであらうか。

先づ最初に考へられることは若しカルタゴの撲滅が行はれなかつたならば事態は如何なる展開を見せたことであらうか、と云ふ様な問題である。恐らくそれはローマの、また世界史の運命を變へたものであらう。さう云ふ様なことについて内外の事情から若干さぐりを入れて見たならば如何なるものであらう。

大體ローマとカルタゴはその成長發展に於て同質の文化をもつたものではないか。それは要するに溢れ充つる東方及びギリシアの文化力と西方未開地との仲介者たる地位にあつた様である。それは一面に於て潑刺たる文化の吸収力を見せると共に、他面に於てその商業が軍事力、政治力と結びついてのみ進展する運命にあり、露骨な帝國主義の發展には好適なる事情があつた。この場合、カルタゴの經濟力が

ローマに擡んでゐたことは申すまでもないが、カルタゴはまた武力の點に於ても斷じて過少評價をしてはならぬのであつて、これは三回に亘るポイニ戰役の戰鬪力からも十分にその實力を評價して置かなければならぬ。従つてカルタゴはローマにとつて最後まで容易ならざる敵手であつたことを忘れてはならぬ。そこで考へられることはこのカルタゴの破壊が、これから後に起つて來るマシリアの破壊と同じやうな重要性をローマ史上に於て有つものではないかと云ふことである。抑ゝ進展して行くローマ勢力の前にあつて、それ等の都市は重要なもの、少くともローマより重要なものであつてはならぬ筈である。

第二回ポイニ戰役によつてローマは西部地中海を制することになつた。それは文化力や經濟力によるものではなく、その政治力と軍事力とによつて、もつと正確に言へば後者のみによつて得たものであつた。

即ちその政治的軍事的制御は當然の結果として「支配」を生む運命にあつた。つまりローマの發展が政治的軍事的であつたと云ふことは文化的や經濟的發展と異つてその動きに「支配」と云ふ決定的な形態を與へずに置かなかつたのであつて、西部地中海の霸權掌握に際してその形態をとるか否かはその後ローマの運命の一切を決定する筈であつたのである。さて此の場合、支配するとは如何なることなのであらうか。結局それはその對象としてゐる存在を自己の運命に固く結びつけ之を自由に驅使すると云ふことでなければならぬ。つまりローマが地中海を支配する日が來るとすれば、それは地中海周邊の諸地方が完全にローマの一部となる日でなければならぬのである。もし然うでなければ地中海を支配して

ゐるとは言へない。紀元第十二世紀に十字軍の運動を通してイタリア諸都市の船は地中海貿易を獨占することになつた。しかしそれでは地中海を支配したとは言へないのである。即ち地中海はローマの時の様に「我等の海」*Mare Nostrum* と言ひ得ないのである。この場合、その指導者たんとするものは常に己が世界を支配し、支配せんとつとめねばならぬのである。然らざれば事態は分裂紊亂を生むのみでその指導と云ふことは意味をなさなくなつてしまふ。一般の政治が責任のなすり合ひであつてはならぬと同じ様に、支配者は飽くまで積極的な指導理念をもつて行動しなければならない。此の點に於て吾人の念頭を去るべからざる課題は即ち大ローマは興へられたものではなくして、建設されたものであると云ふことである。もしガリアに對してローマより重要な地位を占めるものがあれば、これを倒さねばならぬ。従つてマシリアは破壊されなければならないのである。同じく若しアフリカに對してローマより重要な地位を占めるものがあればまた之を倒さねばならぬ。従つてカルタゴは所詮破壊せねばならぬのである。この立場は高等政策に終始した東方に對するローマの經營を見ても何等變化なく行はれてゐるのであつて、やがて東方文化世界と西方未開世界の仲介者の立場に立つてローマは全歐に君臨することとなつたのである。元來それは政治的な要素の下に築かれ、經濟的には殆んど問題とならぬものであつた。それを經濟的に力あらしめたものは即ち軍隊であつた。従つて後世になり、その軍隊が國境の防備に追はれ、政治の中心が一旦ローマを離れれば、政治的にのみはじめて強くその存在を主張し得た西

歐は分裂以外に道が無かつたのである。ローマがガリア、ヒスパーニアの軍隊の中から皇帝を出してゐるうちは帝國は安泰であつた。それが財政的窮乏をむかへ、東方の經濟力と結びついた人々を皇帝に輩出することによつて西歐は忘れられ、帝國は崩壊して行くと云ふわけである。かくてこの様に政治軍事の勢力を中心に成長せんとするローマが全地中海を制せんとするに當り、先づカルタゴの破壊によつてその第一歩を切り出したと云ふことが出来るわけで、もし然うであるとすれば此の事件はローマ史上の一大轉換であつたと見なければならぬ。一體、戦争といふものが何う云ふ風にして起つて来るものなのであらうか。一つの國が他から戦争をせねばならぬ様な状態に追ひ込まれ、やむを得ず消極的に、つまり責任は他にあつてそれがために戦闘へ追ひ込まれることによつてのみ戦争は起るものなのであらうか。然う云ふ風にのみ歴史上の戦闘を見てよいのであらうか。然う云ふ見方に縛られてゐる限り、第三回ポイニ戰役即ちカルタゴ撲滅の謎は解き得ないのではないかと思はれる。何故なら此の場合に於けるローマは徹頭徹尾、能動的であり、重ねてカルタゴに加へられる苛酷な條件は次から次へと充されつつ、而も結局それは宣戰布告なき、戦闘となり、都市カルタゴの破壊とまで事態を進めて行くからである。更にまたこれが明かにローマ史上に於けるローマの對外的な動きの一つの決定的轉換であるとするれば、その轉換を誘致せしめた有力な動機と言ふべきものが外の世界にも、即ち當時の北アフリカにも認められないであらうか。この點で特に注目すべきはヌミディア王マシニッサの存在である。ローマが東のギ

ロシア世界に對しても、この北アフリカ世界に對しても、此の當時用ひてゐた外交政策は申すまでもなく高等政策であり、それらの地域に於ける諸勢力をして互に牽制せしめるの策を常道としてゐたのである。その高等政策が第三回ポイニ戰役で遽かに而も決然と放棄されてゐるのは何故であるか。筆者はそれを次の如く解釋して見たい。由來、高等政策は其處に二個以上の勢力の存在を前提とする。當時ローマはカルタゴに對してヌミディアのマシニッサを支持してゐたのである (Polyb., XXXII, 2)。このマシニッサは少くとも文獻 (Polyb., XXXVII, 10) を通して見た處では識見もすぐれ技倆もあり體力も旺盛で (九十歳の時、四歳の子がゐる)、兎も角、野蠻人の王とは言へ非常に立派な人であつた様にうかがはれる。ローマがポイニ戰役を通してよくカルタゴを壓へ得たのは此の人物の努力に待つところが極めて大きかつた様である。このローマにとつて大切なマシニッサは第三回ポイニ戰役の最中に死んでゐるが、もう既に非常な老齡に達してゐる。而もこの人の死後をたのむに足るだけの人物は當時ヌミディアに存在しないのである。それがローマに極めて大きな不安を與へてゐたことは十分に認めて置かねばならぬと思ふ。それは兎も角、このカルタゴの撲滅こそローマの國運を決した一大轉換であると稱しても過言ではないであらう。それはローマが爾後の動きを決定した事件であると共に、それによつてローマが所謂ローマの歩むべき道を天下に公示した事件でもあつたと言へる。人これと呼んで或は野蠻な行爲と言ふかもしれぬ。しかし人が何う呼ばうと之がローマの發展して行く姿なのであつて、ギリシア的發

展はそのままローマのものであり得る筈はない。カルタゴの破壊はローマの發展途上になくはならぬ一事件であつたと言つてもよいのである。即ちカルタゴの破壊がなければあのローマ的一切の發展はその後、期待すべくもないのではないか。カルタゴの破壊がなければローマの發展は其處までで萎縮する以外に道がなかつたのではないか。ローマがその後あの様な發展をするにはカルタゴの滅亡がどうしても必要であつたのではないか。果して然らば何がカルタゴの壊滅を生んだと言ふべきであるか。即ちそれは次の如く要約することが出来るであらう。來るべき新時代の建設がその破壊を必要とした、と。吾人は其處に大きな時代の動きを感じざるを得ないのである。カルタゴ滅亡の當時、このことを深く感じてゐたものは偉大な歴史家のポリビウスで、この感慨は彼の記述に強くにじみ出てゐるのである。彼について我々が感服させられる點は彼が材料の取扱ひに於て巧妙であつたといふことではない。その史觀が立派だつたといふのでもない。實に彼がこの時代の動きを最も具體的に把握してゐたと云ふ事實でなければならぬ。彼は感傷的な修辭に充ちた歴史を輕蔑したり嫌惡したりしたから優れてゐるのではない。然う云ふもので言ひ表すことの出来ないやうな大きな時代の動きを感じずに居られなかつたと云ふことが第一のものでなければならぬ。彼はギリシアの文化世界が所詮このローマ世界に吸収せられる運命にあることを認めた最初のギリシア人であつた。其處に歴史家としてのポリビウスの偉大さがある様に思はれる。我々がポリビウスについて學ぶべきは實にこの點であると言はなければならない。さて

この様にカルタゴの撲滅をもつて大ローマの所謂生活圏 *Lebensraum* の建設の第一條件と考へる、即ち第二回ポイニ戰役によつて一躍西部地中海の覇者となつたローマが次で全地中海の王者となるにはカルタゴの滅亡が必要ではなかつたか、これは大ローマ建設の途上になくはならぬ事件ではないのか、更に言葉を換へて言へば、カルタゴを滅ぼさねばならなかつた處にローマ發展の祕密があるのではないかと云ふ課題が此處に一つ成立するわけである。

次に問題となるのは歴史上凡ての大きな轉換が然うであるやうに、この轉換はローマの内外に危機を孕み、またその内外の危機がこの轉換を生み出してゐると云ふ事實である。吾人は其處に所謂ローマの非常時を見ることが出来る。事實、このカルタゴ撲滅の行はれた紀元前第二世紀の中頃はローマの進展の上から見ると一つの重大な危機を意味してゐたのである。それは凡ゆる點から見てローマ發展史上、内憂外患の最もはげしい時代であつたと言へる。即ち對外的に之を見れば東方のギリシア世界にはアカイア同盟を中心としてローマ排斥の聲が次第に高まりつつあり、事實それはマケドニアの叛亂を生み、アカイア同盟の謀叛となつて具體化してゐるのである。他方、西部のヒスパーニアに於ても紀元前一五四年より叛亂が續き、之は東方のものと異つて頻る頑強であり、事實ローマ軍はその戰略の拙劣なりしことと兵力の不足とに著しく悩んでゐたのである。之等の情勢と呼應して第三回ポイニ戰役がアフリカに起つてゐるのである。また對内的に見れば、此の頃ローマの傳統的な國民兵の強味は第二回ポイニ戰役

後の澎湃たるギリシア化と共に迅速に失はれつつあつた。丁度これはグラックス兄弟の改革運動を迎へる前夜のローマであつた。それは少くとも軍事的に見て一つの行詰りを見せてゐた社會なのである。しかも一切が軍事にかけられてゐたローマに於て殆んどそれは致命的な問題であつたと言へる。ローマはその將來に於て何處にその發展の中心を求めたらよいのであるか。それは一口に言つて方向を失ひかけてゐる社會であつた。最早、因循姑息な手段などで彌縫されるやうな問題ではなかつたのである。まかり間違へば凡ての形勢は樂觀を許さぬものがあつた。かかる事情の下に内政の大改革は必至の情勢をむかへてゐた。然も先づ差當つて外から來る目前の危険をとり除いて置くことは極めて肝要な事柄であつた。當時このローマの指導者として政治の衝にあたり、常に國家の運命を多少なりとも考へさせられてゐた元老院の人々が此の場合、カルタゴの撲滅について一致結束し、決然たる態度を示したとしても、それに不思議はないのである。しかもなほ忘れてならぬことは此の動きの中にも勿論、若干の危機を孕んでゐるのであつて、數年に亘るカルタゴの攻圍が當時の自信を失つたローマに少なからぬ不安動搖の念を與へてゐたことはアッピアヌスの記述 (App. Pun., 112, 134) を通しても十分に之をうかがふことが出来るのである。ところで此處に注意すべき問題は此の場合、幾つかの内憂外患が併さつて其處に直ぐ戦争が起つたと見るやうな立場を簡單にとつてはならぬと云ふことである。然う云ふ單なる常識的見解は斷じて之を拒げなければならぬ。一體幾つかの事件や幾つかの事情が國家の一つの動きを生むと考

へてはならない。嚴密に言つて然う云ふものは寧ろ國家の動きに條件を與へるものに過ぎないのである。何故なら、事件や事情そのものとしては如何に大きなものであらうとそれを感ずる主體如何によつてその影響は大きくもなれば小さくもなるものである。後世の史家が何んなに大きな意義を其處に認めようとも、そのもの自體が必しもその通りの印象を受け、また當然さうあるべき行動をするものとは考へられないのである。その證據は、事實、滅亡に直面してゐるカルタゴの態度を見ればよく分る。同じ重大な局面に相對しても決してローマとカルタゴとは同じではない。今日、無駄な抗戦をつづけて行けば支那は自滅することが分つてゐても、現に蔣介石は依然として抗戦をつづけてゐる。それ故、史上の變遷は常識なソロバンをはじいて見ても全く無駄であると申さなければならぬ。ましてや表面上、述べられてゐる理由などと云ふものは如何に整然としてゐても多くの場合、要するにただ名前だけのものであると考へた方がよいのである。我々の日常の行動にしてみたところで理由はほんの一部分を占めるにすぎない。それ故、我々は歴史に於ても表面化された理由などを求めるに血まなこになる必要はない。これは自明の理でありながら然も實際に於て史的考察の場合に屢々忘れられがちである。大東亞戰勃發直後、アメリカ合衆國の一參謀が緒戦に於ける味方の慘敗を説明して「敗けるのは當然である、合衆國は軍艦の代りにパンを求めたからである」と言つたと新聞は傳へてゐる。この様な理由を幾ら寄せ集めて見たところで合衆國の敗北を説明することは出来ない。それは一面に於て然う云ふことが言へると云

ふだけのことである。またもつと本質的なつつ込んだ解釋にして見た所で、その様なものが幾つか寄つて一つの結果を生んでゐると云ふ考へ方はよろしくないのである。その結合が殆んど凡てであると思はれる様な場合であつても、部分をその部分たらしめてゐる全體は部分そのものと同一視されてはならぬのであつて、部分がよつて全體をなしてゐると云ふ考へ方は極めて幼稚な考へ方であると言はねばならぬ。それは丁度、一個の人間を構成するのは頭と胴と手足であると云ふ考へに他ならぬのであつて、史的考察の場合に斷じて避けねばならぬ考へ方である。それ等のものは單に一個の人間の部分なのであつて、それが寄せ集つて一個の人間を構成するのではないことは自明の理である。我々は歴史研究の上でこのことを忘れてはならない。然らざれば其處に流れてゐる生命を見失つてしまふであらう。凡そ國家の動きを考察する場合、多くの徳はあるが而も徳は一つだと云ふこと、モーゼの十戒には十個の戒律があつてもなほ一つの正しさがあるのだと云ふこと、これは忘れてならぬことであらうと思ふ。然らざれば問題は徒らに多岐に分れ、思考は千々に亂れ崩れてしまふことであらう。然らば我々はこの場合、如何にしてローマの動きをとらへて見るべきか。これは比較的明瞭な問題であると思ふ。つまり我々は常に一つの點を、生きた現在のみを考へてゐなければならない。懷古は詩人や好事家の仕事である。我々は生きた現在を常に過去に於て見る。これこそ我々の眞の仕事でなければならぬ。我々は單なる過去を問題にしてはならぬ。或時を歴史的に考へる場合には常にその時に於て生きて動いてゐる過去を見て行か

ねばならぬ。過去が偉大であるのは現在に於てそれが生きてゐるからであらう。我々はその生ける現在を常に見て行かなければならない。つまりその瞬間、その過去が如何に生きて動いてゐるかを見、それをとらへねばならぬのである。戦争状態を生むものとして其處には種々な理由が認められる。我々としてはそれ等の理由を作つてゐる、その理由を契機に一つの飛躍を試みようとしてゐる本體を考へて見ればよいのである。つまりカルタゴ撲滅の場合にして見れば、カルタゴの條約違反と云ふことを一つの理由にしてカルタゴの撲滅を將來しようとしてゐるローマの動きを考へて見なければならぬのである。つまり前に述べた様な課題が如何にしてローマの史上に具體化されて來るのか、前述の如き一大轉換が如何にしてその歴史の上に實現の機をむかへるに至つたか。もう少し細かに言へば、最初、カルタゴ撲滅の叫びを上げたカトーの言葉に殆んど耳を傾けなかつた時代から、ローマの動きが如何なるものによつて條件づけられ導かれて終には徹底的なカルタゴの破壊を決意するまでに至つたのであるか、を考察して見なければならぬわけである。結局それはポイニ戰役といふ大きな戦争がローマの社會に與へて行く根本的な變革を常に綿密に検討しつつ、その中にローマの爲政者が如何にしてその國家の方向を見出して行つたかを考察して見ることによつて初めて解明される問題であらう。今、此處にその變革の重なるものを點綴して見れば凡そ次の如くである。

ローマは第二回ポイニ戰役に勝利を占めたが、此の十七年間の激闘を通してイタリアは勿論、ヒスパ

ニア、ギリシア、シシリー、アフリカに戦線を展開したローマは凡てそれによつて舊秩序を破壊され、従つて眞にローマ的な強味もそれによつて相當致命的な傷を受けた。公私の富は使ひつくされ、兵制は一變され、商業が顯現し、堅實な保守の精神は失はれてしまつた。これはローマ史上に於ける本質的な一大轉換であつたと言へる。新しいローマが建設されねばならぬ運命にあつた。これまで全く軍事的農業的國家であつたローマはこれより商業による活動發展をもつことになつた。然もそれは決して坦々たる大道ではなく相當至難な將來を豫測させてゐた。扱、ローマではプブリウス・スキピオを中心として溫和派（極端な帝國主義に對する）が次第に勢力を得て行つた。之は實際派の人々であつたと言へる。如何にしてもローマは一時に二十萬以上を召集することは出来なかつた。而も小農たる之等の人々に長期に亘る軍務を課することは出来ぬのであつて、それ故に無暗な發展論が中流階級の支持を失ふに至つたのは當然であつた。加ふるにシシリー、サルディニア、コルシカ、ヒスパーニア、北伊を保持するのみにても當時のローマの社會状態を以てすれば寧ろ大きに過ぎる位のもので、此處に自重派の有力となつた原因がある様に思はれる。此處しばらく元老院は之等の自重派を中心として對外的には専ら高等政策をとつてゐた。當時、富の流入は社會の組織、風習を變へ、先づ第一に奢侈を教へた。時として軍團兵は土着民と交易し、マケドニア戰役中に高利貸をやつた兵士もあり（Liv. XXXIII, 29）、貧しい農夫は何れも若干の財を握つて凱旋した（Plut. Cats. Maj. X）。もうかりさうな戰爭であれば各地から

義勇兵が集つた (Liv., XXXVII, 4, XLII, 32)。兵士等に利得ある戦であれば、國家にとつては一層大きな利得がある筈である。財政はその收入によつて當然大きな黒字を生み、やがて濫費をもたらすやうになる。かくてローマ社會はギリシア文化に眩惑された上流階級を中心として一般的奢侈を見るやうになつた。活潑な土木事業や種々の請負は新に富を蓄積した若い冒險的な人々によつて大いに歡迎され (Polyb., VI, 17)、多くのものが土地を買ひ、鑛山、森林、耕地を借受け、或は租税の請負をやつた。資本と奴隷勞働が増加すると新しい國有地での投機が一般化して來る運命にあつた (Liv., XXXI, 13)。これによつて若干の舊元老院議員と多數の新參者が莫大な産をなした。斯くの如き事情は必然的に古來のローマ傳統に深甚な影響を與へずに置かなかつた。勿論、その頃のローマの文化吸収力が大したものであり得た筈はなく、紀元前一七四年に於てさへローマは何一つ美事な街路、宮殿、紀念碑をもたぬ大きな村落にすぎず、貴族の家屋と言つたところで粗末な小さなものであつたし、教育も古くさいものであつたと思はれる (Liv., XL, 5)。しかし其處には長い間の束縛から解放された様な奔放な積極性が著しく認められることは事實である。オッピア法 (奢侈法) は撤回され、東方の贅澤品 (香料、バビロニア絨緞、金或は象牙の家具) がもち込まれ、生活は凡て豊富なものになる (Liv., XXXIV, 1, Plaut. Stich., II, 2)。地方もローマを見習ひ、中流以上の青年は何れも喜んで戦争へ出かけて行つたものらしい (Plut. Paul. Aem., XXII, 2)。かくて四圍の情勢は商業の發展を必至ならしめた。歸還の勇士は多く

土地を賣つて船を購ひ、利益の多い航海を試みるやうになり、ローマ人は何れもデロスによつてコリントス、ロードスに對峙した。船材を産する森林は話題の中心となり (Cic. Brut., XXII)、元老院の人々も海運業には協力した (Plut. Cato Maj. XXI)。東方の文化生活がローマへ大規模に輸入されることとなり、奴隸も東方から續々とつれて來られた (Liv., XXXIX, 22)。無數の外國貨幣がローマに流入し、多くの寶石商はやがて兩替屋になつた。飲屋、浴場、靴屋、染物屋、寶石商、裁縫師、座元、劇作家などが數多く生れて來る (Plaut. Aul., III, 5)。けれども之等の變化の中で、最も大きな結果を後世に與へたものは申すまでもなく奴隸の使用であると言はねばならぬ。奴隸は凡ゆる場所に必要とされた。牧童、大工、職人、水夫、闘士、一般家事使用人としてその數はいよいよ大きなものとなる。ローマには之等の世情に推されて新しく奸智に長けた、服従を知らぬ、利得に對しては附和雷同する所謂市民が成長することになつた。富裕な之等の人々は武力を握つた將軍と結托して之よりローマの政治を動かすことになる (Plut. aul. Aem., XI, Liv. XLIV, 22)。この間、ローマの外交は一大變化を來たすることになる。これまでのローマ外交の基調は外民族に對する取扱ひに於て各自の民族性を高度に認めて行くのが一つの誇りとなつてゐた。ところが新しい外交は凡ての外民族を蔑視し、絶えず自己の權利を主張し、目的のためには手段をえらばぬ類のものとなつて行く。かくて盟邦のロードス、ペルガモン、エジプトは何れも屬國化され、その徹底的な高等政策は東方に不斷の分裂混亂を生み、原因も宣戰布告もない戦

争が繰返されることになる (Liv. XLII, 7, 8, XLIII, 1, 5)。時代の波は家庭生活にも滲透して、婦人は次第に自由を獲得し、離婚や姦通は日常茶飯事となつて行く。時の敗者は收税請負人の苛斂誅求、家庭生活の紊亂、新外交の不名譽、東方文化の悪影響をつぶやく。然もローマはその歴史的な進展を續けて行くのである。大ローマが其處に生れて行くのである。憂國の政治家もゐないではない。しかし曉天の星の如き存在が大勢を如何にして左右し得たであらうか (Liv. XLII, 22, XLIII, 2)。第三回マケドニア戦役の苦い経験はこの大勢に對して何等の變化をも與へてゐない。反つてマケドニアの没落でローマは問題なく地中海の覇者となつたため東方に對する高等政策は徹底化し、有力な據點は一つ一つつぶされて行く。ロードスの勢威は打破され (Aul. Gell. Noc. Att. VI, 3)、結局デロス、カルタゴ、コリントスが地中海に鼎立することとなる (Polyb. XXXI, 7)。ところでピドナ戦役以後、紀元前一六八—一五四年は平和で戦争がなく、戦利品にうるほふことなきローマは次第に沈滞の運命にあつた。ローマは戦ふ以外に力をもたなかつたからである。しかも他方に於て物價や生活程度は上るのみであつた。新時代に適應せぬものは食へなくなつて行くばかりで、此處に傳統、制度、思想に於ける一大轉換は必至の運命にあり、奢侈は必然的に増大して行くと共に農業はいよいよ至難なものとなつて行くのである。生活に窮迫した農民はローマへ流れ込み、ローマは人口増加によつていよいよ食糧危機が濃くなつて行く。この變化のつながりの中に舊貴族の多くは貧化し、破産し、消滅した。と同時に古來の道義は全く地に

墜ちてローマは完全な金權政治を見ることになる。將軍は兵士の氣風に左右されて訓練ある軍隊は過去のものとなつて行く (App. Pun., 112, 115-117, Hisp., 85)。紀元前一五四年に始められたヒスパーニア役の如きは敗北につぐ敗北で (Liv., XLVII)、最早それは之までの様な軍隊行進にあらず、一つの長い苦闘となつた。兵士も將校も之を得るに極めて大きな困難があつた。之はローマにとつて將に一つの危機と申さねばならぬ。我々は其處にカルタゴなるものが、その存在の仕方によつてでなく、存在そのものによつてローマを苦しめるに至つた事情を洞察しなければならぬ。思ふに我々は現在、第二次世界大戰の眞唯中にあつて戦争といふものを本當に動かしてゐるものが何であるかを最もよく考へて見ることの出来る立場にあると云ふことが言へる。戦争といふものが果して外からの壓迫、不合理な四圍の情勢といふ様な消極的な面からのみ動いてゐるものか何うか、もつと積極的な國家の動きといふやうなものが其處に考へられないか、もし然ういふものが考へられるとすれば、その積極面に消極面が如何にして結びついて行くのか、さういふことがまた一つの重要な課題になるのではないかと思ふ。

(昭一八、一、一八議)